

中世房総における陶磁器類の流通・消費動向

井上 哲朗

目 次

1. はじめに	389
2. 分析対象遺跡の概要	390
(1) 中世前期	390
(2) 中世中期	390
(3) 戦国前期	390
(4) 戦国後期	394
3. 各遺跡出土陶磁器・土器の組成	394
(1) 種類・産地別組成	394
(2) 編年(時期)別組成	395
(3) 器種構成	402
4. 遺跡の性格・地域による組成等	406
(1) 遺跡の性格による差異	406
(2) 地域差	406
(3) 編年に関する問題	407
5. おわりに	407

1. はじめに

かつては、城主は山の下館に居住し、城は非常時に立て籠もる施設であるという従来の教科書的イメージと中近世考古学の未認知から、トレンチ調査のみで終了した例もあった城館跡の発掘調査は、県内埋蔵文化財調査組織の充実、高速道路建設等の増加等により1980年代後半以降は県内中世遺跡の大規模発掘調査が増加し、台地城郭上でも生活を営んだ痕跡としての良好な資料が蓄積されつつある。同時期に深化した陶磁器編年と突き合わせる中で、筆者も含めた県内また東日本の中世史研究者の間では、文献上或いは縄張構造上は天正18年（1590）まで機能したと考えられる城でも、遺物特に瀬戸美濃窯製品は16世紀後半のものが少ないことをどう解釈するかという疑問が生じていた⁽¹⁾。それについては、常駐しない城（砦）や漆器等木製品の存在が想定されると共に、編年別の遺物量からその遺跡のピークを示すことが通常行われてきた。

しかし、ここで注意すべき点は、各種類・産地の陶磁器編年の各期間や生産・供給量は一定ではないことである。例えば、瀬戸・美濃製品は古瀬戸後期Ⅳ期新段階から大窯1期（1460年頃～1530年頃）の出土量は他期を凌駕しており、16世紀後半の減少は畿内の都市や織豊系城下町に大量供給されたことが一つの要因と推測されている⁽²⁾。また、共に搬入されたと推測される常滑甕は10型式（15世紀後半）が突出し、11、12型式（16世紀代）は減少している。こうした点から、筆者は遺構・遺跡の性格や地域の違いによる出土遺物のセット関係に流通量を加味した再検討が必要とした⁽³⁾。

そこで、本稿は、小野正敏氏のリードにより90年代以降普及しつつある各遺跡出土中世陶磁器・土器の破片数集計^(4, 5)を改めて集成或いは数え直して基礎資料を作成して概観したものであり、(財)千葉県文化財センターによる8遺跡の調査成果を主とし、参考として他機関の調査による4遺跡（篠本城跡・生実城跡・一宮城跡・中馬場遺跡）を加えたものである。

分析の方法は、基本的には接合後の破片数を集計したが、数量が報告書非掲載のものについては、改めて資料調査したものも実測図・写真等から判断したものもある。また、各報告書等の遺物分析方法の違いについては、例えば全て編年に合わせた数量ではないので、短期に収まる部分については前後の編年に案分し、長期に亘るものについては例えば「瀬戸美濃後期様式」・「大窯期」或いは「不明」とした。実見後、報告書掲載の編年・年代観等を改めたものもある。よって、各数値は今後も若干の変動があり得る。また、漆器類については、湿地以外では残存していないので今回は加えていないが、鎌倉等では重要な割合を占めていることから、今後は無視はできない。

各編年については、中世前期貿易陶磁が横田・森田氏⁽⁶⁾、中世後期の白磁が森田氏⁽⁷⁾、青磁が上田氏⁽⁸⁾、染付をはじめとした全般の年代観が小野氏^(9, 10)、瀬戸・美濃窯が藤澤氏⁽¹¹⁻¹⁴⁾、常滑・渥美窯が中野氏⁽¹⁵⁾の成果による。瀬戸・美濃窯の古瀬戸後期Ⅳ期新段階の資料は県内中世城館で最も多く出土していることから、画期となるものと考えて古段階とは分けて集計し、大窯各期については前半・後半の区分がされていないものも多く有効データを減らすことになるので一括した。

2. 分析対象遺跡の概要

各遺跡の概要は、基本的にはそれぞれの報告書や論考の他、『千葉県の歴史』⁽¹⁶⁾によるものであるが、100m²あたりの遺物点数については、今回提示するものである。

(1) 中世前期 (12世紀後半～14世紀前半 I期)

鋸南町下ノ坊遺跡⁽¹⁷⁾ (第1図) 1町程に推定される堀に囲まれた空間に掘立柱建物跡や井戸が検出され、12世紀後半から14世紀後半の在地領主の館跡(政所)に推定される。調査面積4,900m²、中世陶磁器類73点で100m²あたり1.5点である。

君津市外箕輪遺跡⁽¹⁸⁾ (第1図) 当地区では(財)千葉県文化財センターと(財)君津郡市文化財センターが調査しているが、各地点で若干様相が異なるため、本稿ではとりあえず前者のみを対象とした。沖積微高地の条里地割に規定された農村及び一般農民層の屋敷地に推定される。調査面積2,400m²、中世陶磁器類45点。1.9点/100m²である。ちなみに後者調査区は、多くの掘立柱遺物跡や鎌倉に近い高級陶磁器類の出土から、有力農民層或いは在地小領主層の屋敷地に推定される。

木更津市芝野遺跡^(19, 20) 沖積微高地に掘立柱建物跡や井戸が検出され、12世紀後半から15世紀前半の小百姓・小作人層の屋敷地に推定される。調査面積8,100m²、中世陶磁器・土器266点、3.3点/100m²である。

(2) 中世中期 (14世紀後半～15世紀中葉 II期)

袖ヶ浦市山谷遺跡^(21, 22) 台地上を通る通称「鎌倉街道」の中近世道路とそれに沿って検出された「市」として紹介されたが、全体としては12世紀後半から15世紀中葉の街村(宿)に推定される。調査面積18,200m²、中世陶磁器・土器1,173点、6.4点/100m²である。

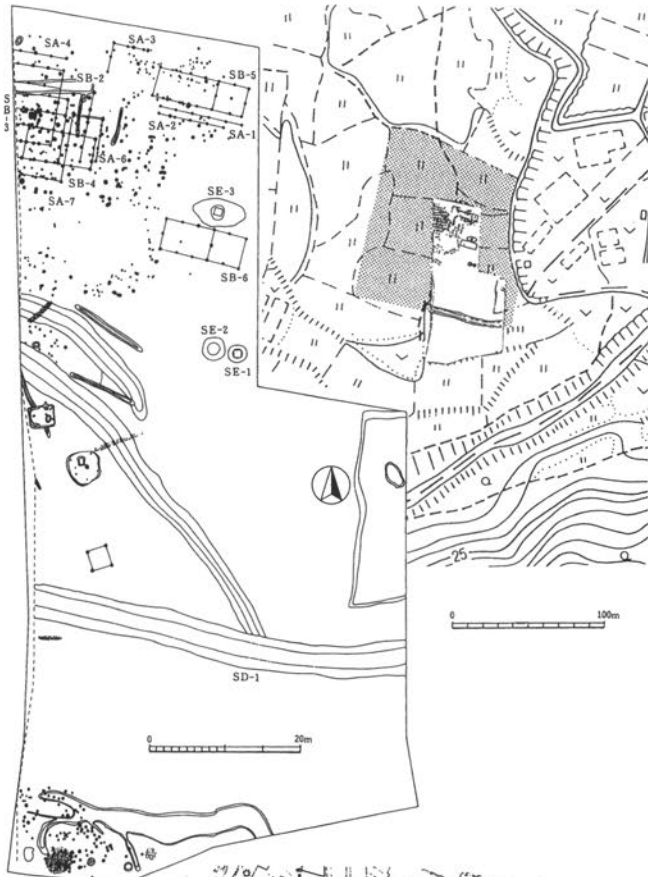
袖ヶ浦市荒久(2)遺跡^(19, 23) (第2図) 居住域、倉庫・作業域、墓域からなる台地上の集落で、寺院門前に開けた「宿」に推定される。調査面積7,840m²、中世陶磁器・土器1,013点、12.9点/100m²である。

光町篠本城跡⁽²⁴⁾ ((財)東総文化財センター調査) 中世前期の在地小領主層の屋敷や墓地在15世紀段階で堀で区画され、斜面に腰曲輪等が造成され、城郭化したものと推定される。周辺の谷津や台地上では城部より小規模な掘立柱遺物跡や貧相な遺物様相から推測される一般的集落が検出され、階級的な差異が窺える。調査面積29,300m²、中世陶磁器・土器1,032点。3.5点/100m²である。

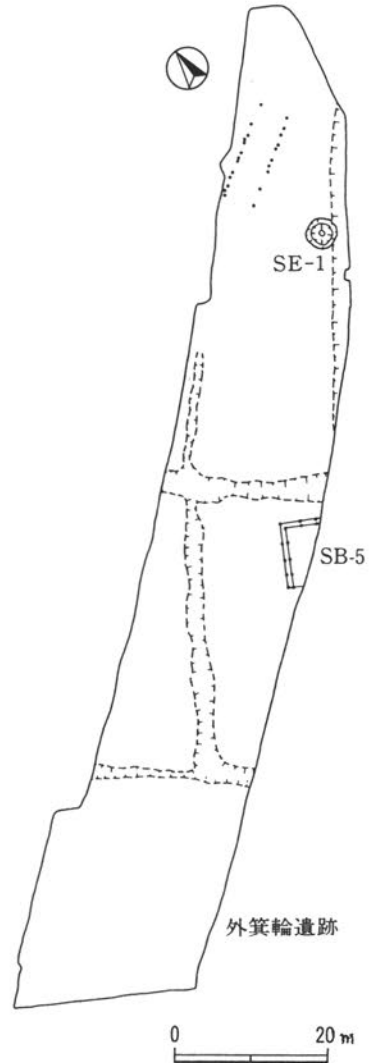
印西市小林城跡^(25, 26) 15世紀に築城され、その後周囲に腰曲輪等を造成されたものと推定される。16世紀代の遺物は殆ど検出されなかったが、虎口の3度の改造や破城行為と見られる空堀の埋め立て等から16世紀代は常駐しない城として機能したことも推定される。調査面積の内、台地上では3,500m²、中世陶磁器・土器785点。22.4点/100m²である。

(3) 戦国前期 (15世紀後半～16世紀前葉 III期)

木更津市笹子城跡^(19, 27) (第3図) 近世初頭の軍記物『笹子落草紙』によると、真里谷武田氏一族武田信茂の城であったが、天文12年(1543)前後の一族内乱により、後北条氏や里見氏も加わって落城したと

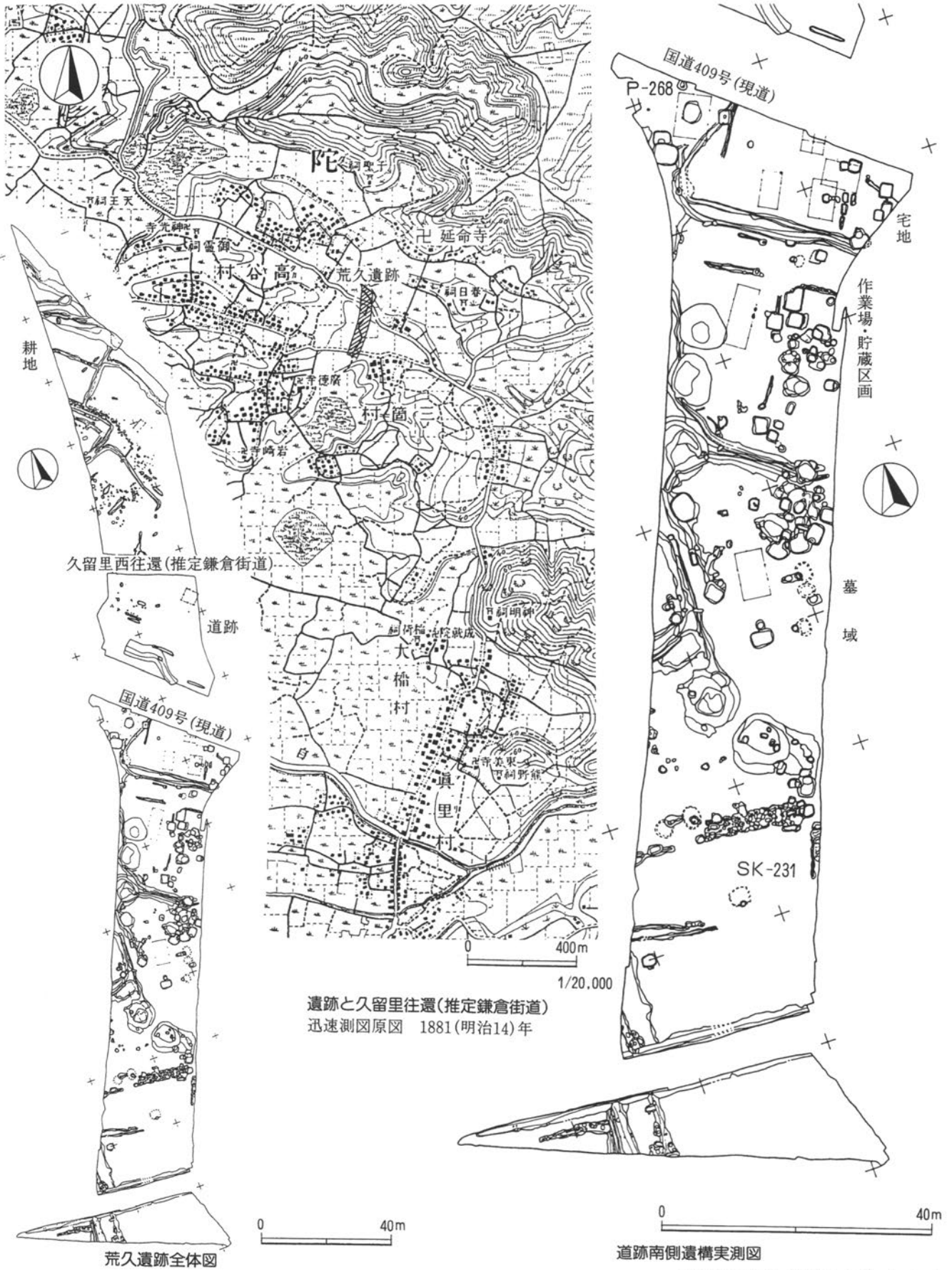


下ノ坊遺跡



第1図 中世前期の館と村

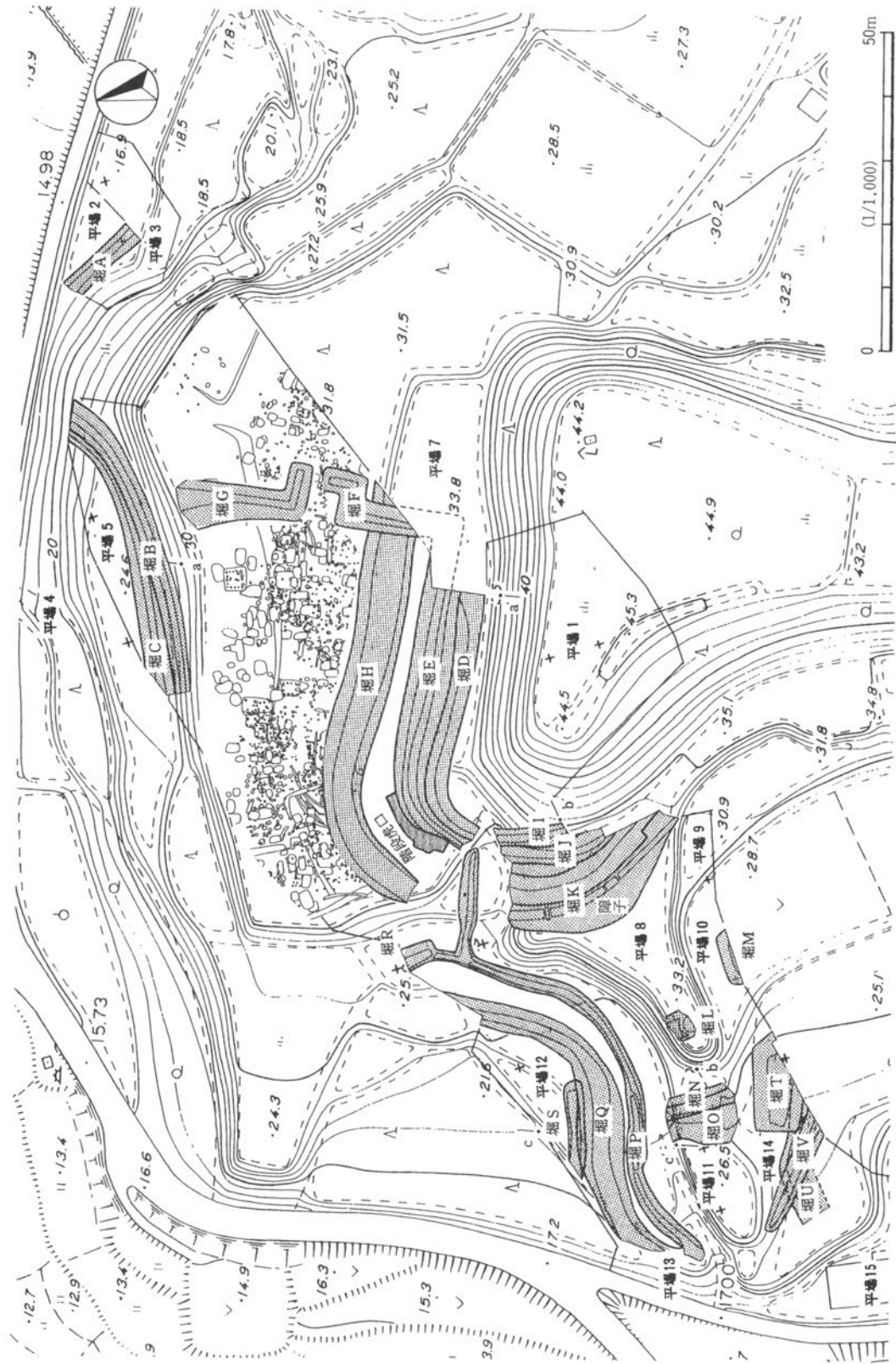
(『千葉県の歴史 資料編 中世1』より)



遺跡と久留里往還(推定鎌倉街道)
迅速測図原図 1881(明治14)年

第2図 15世紀の集落

(『千葉県の歴史 資料編 中世1』より)



第3図 15世紀後半～16世紀半ばの城（籠子城跡）

〔県センター研究紀要20〕より

伝えられる。調査区は広大な丘陵城郭の縁辺部で、数度の空堀の造り変えは曲輪面積を拡張する方向で行われ、多くの建物跡や遺物は生活感に富んだ集落的様相である。遺物は15世紀後半から16世紀前葉に集中する。調査面積9,900m²、中世陶磁器・土器3,833点、38.7点/100m²である。

四街道市北ノ作遺跡⁽²⁸⁾ 鹿島川方面に突出した台地先端部に占地し、小規模な館跡から周囲に腰曲輪や横堀・障子堀を造成した形跡がある。郭内の大規模井戸は全国的にも希有な例である。遺物は15世紀後半から16世紀初頭に中心がある。調査面積は斜面部も含めて8,740m²であるが、遺物が出土した台地上や腰曲輪は4,000m²。中世陶磁器・土器534点。13.4点/100m²である。

(4) 戦国後期 (16世紀中葉～末 IV期)

千葉市生実城跡⁽²⁹⁻³¹⁾ ((財)千葉市文化財調査協会調査) 下総国と上総国の境近辺でもあり、近辺の浜野に良好な湊を持った当地域は原氏と武田氏の攻防の舞台となり、原氏がもう一つの小弓城を奪還した後に当城を築いたとされるが、小弓公方が居城した小弓城も実は当城ではないかとも推測される。近世には森川陣屋が築かれる。調査はほぼ外郭部に相当するが、15世紀後半を中心とする集落や墓地が検出されて宿の様相でもある。調査面積15,200m²、中世陶磁器・土器6,214点、40.9点/100m²である。

一宮町一宮城跡^(32, 33) (一宮市教育委員会調査) 史料上では16世紀中葉以降勝浦正木氏の拠点となり、第2次国府台合戦(1564年)以降は後北条氏方、1577年里見・後北条氏和睦の頃以降天正18年(1590)までは里見氏重臣が入部し、近世には陣屋が築かれている。調査は主郭内で敷かれた玉石から庭園が推定される。遺物群も16世紀中葉が主体である。調査面積4,400m²、中世陶磁器・土器1,045点、23.8点/100m²である。

柏市中馬場遺跡(第4次)^(34, 35) (柏市遺跡調査会調査) 手賀沼の西端部付近に位置する根戸城跡に近接した台地上で検出された大規模集落域であり、堀を伴う館とその周辺の15世紀から17世紀の屋敷地群で、町屋に近い可能性も考えられる。調査面積38,300m²。中世陶磁器・土器2,715点。7.1点/100m²である。

3. 各遺跡出土陶磁器・土器の組成

本章では、各遺跡の出土陶磁器・土器について、まず種類・産地別組成を、次に各種類・産地の編年別組成を、最後に各種類・産地の器種組成を比較したい。各遺跡の主体となる時期は、12世紀～14世紀については2時期に区分されることが多いが今回は分析対象資料点数が少なく様相の変化も少ないので1時期とし、15世紀後半～16世紀末については城館跡を主とした連続する遺跡も多く、1時期として一括される例が多い^(4, 5, 36)が、政治的变化も加味して『研究紀要20』⁽¹⁾の区分同様敢えて2期に区分した。

(1) 種類・産地別組成 (第1・2表, 第4・5図)

白磁, 青白磁・青磁, 染付, その他の貿易陶磁, 瀬戸・美濃, 常滑, その他の国内窯, 土器の8区分の組成を比較した。青白磁は本来白磁に含まれるが、多様な器種を有する点で青磁に含めた。

①中世前期 (I期) 貿易陶磁の出土量は、館(下ノ坊遺跡), 一般農民屋敷(外箕輪遺跡), 下層農民屋敷(芝野遺跡)の順に低下する。瀬戸美濃はほぼ同じであるが、若干増加する。常滑は外箕輪遺跡で少

ないが、耕地部分が主体で建物域の調査面積の少なさによると考えられる。土器類はカワラケであるが、外箕輪遺跡の廃棄儀礼に関連する可能性の井戸跡出土カワラケの多さが割合を上げている。

②中世中期（Ⅱ期） 瀬戸・美濃は街村（山谷遺跡）、門前集落（荒久遺跡）、土豪層の屋敷群・城郭（篠本城跡）の順に多くなる。貿易陶磁は篠本城跡で若干多い。常滑は山谷遺跡で大きな割合であるが、中世を通じて片口鉢が多く、街道沿いの街村（宿）で流通関係または畑作等の生産に関連する可能性も考えられる。また、土器は山谷遺跡に少なく、カワラケと土器挿鉢により小林城跡が突出しており、同城跡ではその分他の割合が少なくなる。

③戦国前期（Ⅲ期） 笹子城跡は真里谷武田氏一族の大規模城郭、北ノ作遺跡は本来は在地小領主層の館から千葉氏の本佐倉城の支城と化したものと考えられるが、各陶磁器の割合は大きな違いは見られない。ただ、笹子城跡は染付・白磁製品の割合が多いことから、領主に近い階層（家臣団）が推定され、周辺の集落が移動してきたとは考えにくい。

④戦国後期（Ⅳ期） 生実城跡は15世紀後半から16世紀末まで続くが、遺物量は15世紀後半が主体となるため、笹子城跡と同様な傾向を示す。ただ、カワラケが少ないのは外郭部に位置することが関係する可能性がある。一宮城跡は16世紀後半が遺物の主体となり、染付・白磁が多く瀬戸美濃の割合が低い。15世紀後半から16世紀の集落（中馬場遺跡）では、貿易陶磁が少なく、土器（挿鉢）が多い傾向である。

（2）編年（時期）別組成

型式等の編年が判別する口縁部等が残る破片数であり、不明なものはグラフには現れていない。よって、グラフは量的にはやや実際の概観とは異なる。例えば瀬戸・美濃製品の碗・皿類でも胴部であれば編年の細分は難しく、破片が多くてもグラフには現れず、大型品である常滑甕等はさらに多く出土している。詳細は第1・2表を参照いただきたい。

①貿易陶磁器（第4・6図）

I期中心の遺跡 下ノ坊遺跡、外箕輪遺跡では、13世紀の白磁碗・皿、龍泉窯系青磁碗（B類中心）が若干量出土している。館跡の下ノ坊遺跡では劃花文碗（A類）も見られ、階層性を示す様である。

Ⅱ期中心の遺跡 山谷遺跡・荒久遺跡では、I期の遺跡同様の傾向であるが、やや量が多い。これは農村と宿・街村の差が現れている可能性がある。さらに、篠本城跡では、中世前期のものが主体だが、白磁皿B群や青磁稜花皿等15世紀から機能する小林城跡・笹子城跡等の城館跡で出土する類の資料も多い。

Ⅲ期中心の遺跡 笹子城跡では、白磁皿B群に加えて皿C群が若干加わり、青磁は稜花皿が多くを占め、更に染付が登場する。染付皿はB1群が多く、C群・B2群も少量の出土が見られる。

Ⅳ期まで続く遺跡 生実城跡は、笹子城跡同様15世紀以降の貿易陶磁器が少量ずつ見られ、若干染付皿E群が多い。一宮城跡は白磁皿C群が突出し、青磁は少量、染付皿はB1群よりC群が多く、E群も若干量見られる。

②瀬戸・美濃（第7図）

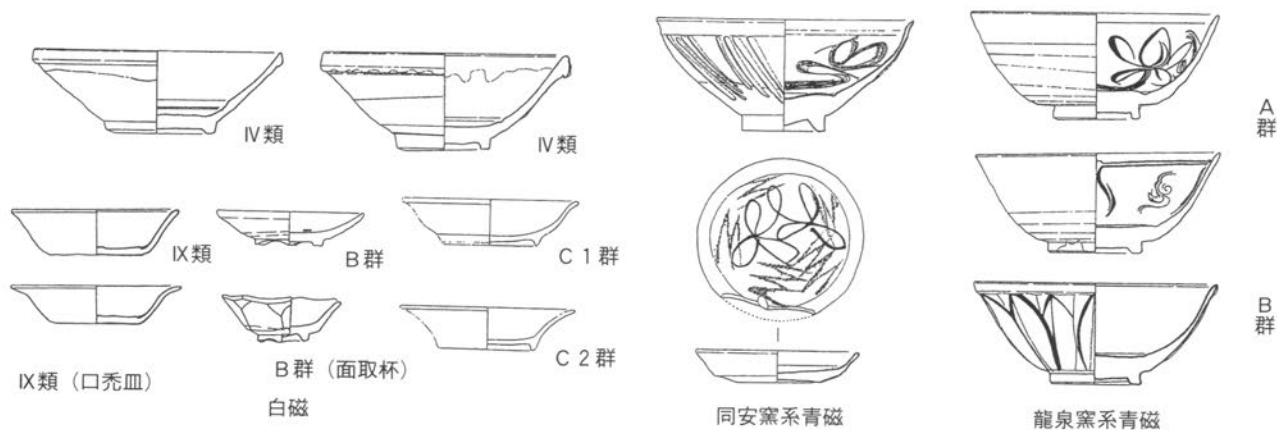
I期中心の遺跡 下ノ坊遺跡、外箕輪遺跡、芝野遺跡では僅かな量である。そもそも瀬戸窯の当時期の生産は高級品が主体であり、蔵骨器や経筒容器に使用される例が多いので当然ではある。

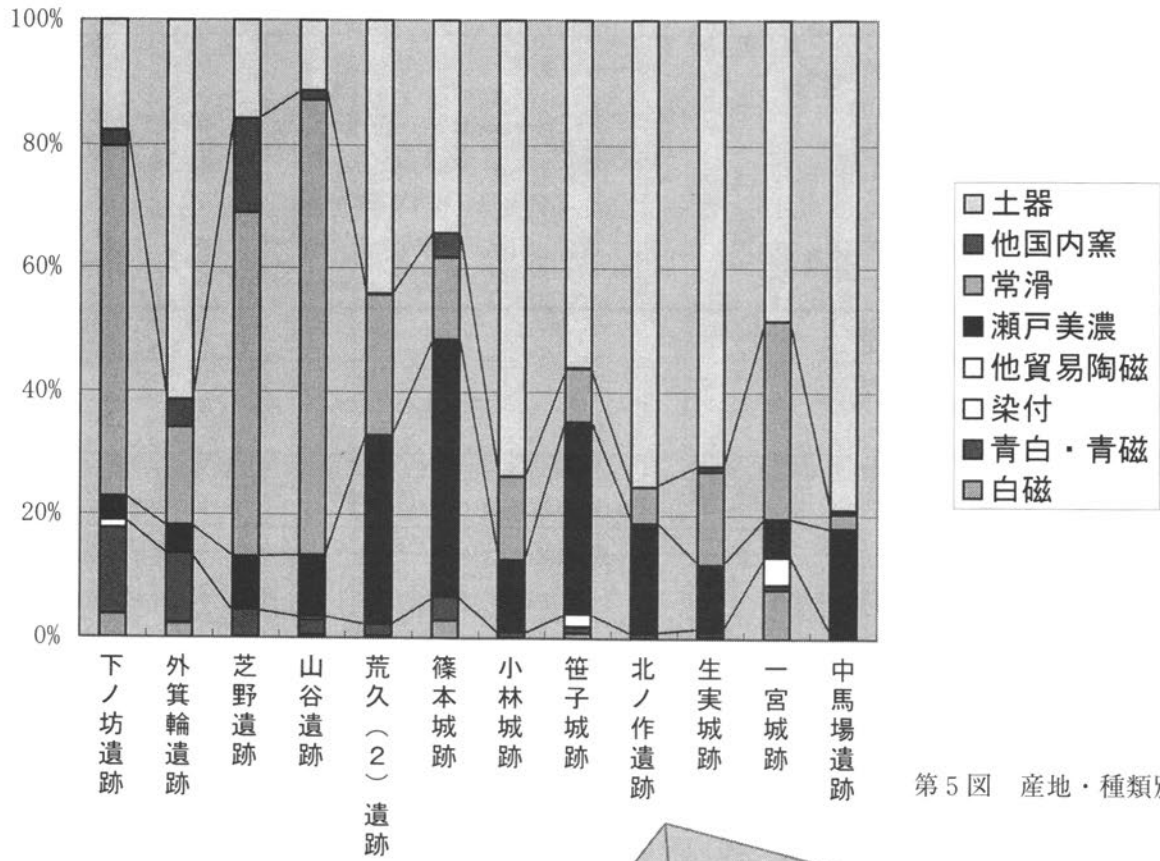
Ⅱ期中心の遺跡 いずれも、古瀬戸中期から若干量がみえ、古瀬戸後期後半を主体とし、大窯1期（15世紀末から16世紀初頭）も若干量が出土している。

第2表 千葉県内中世遺跡出土陶磁器組成表(2)

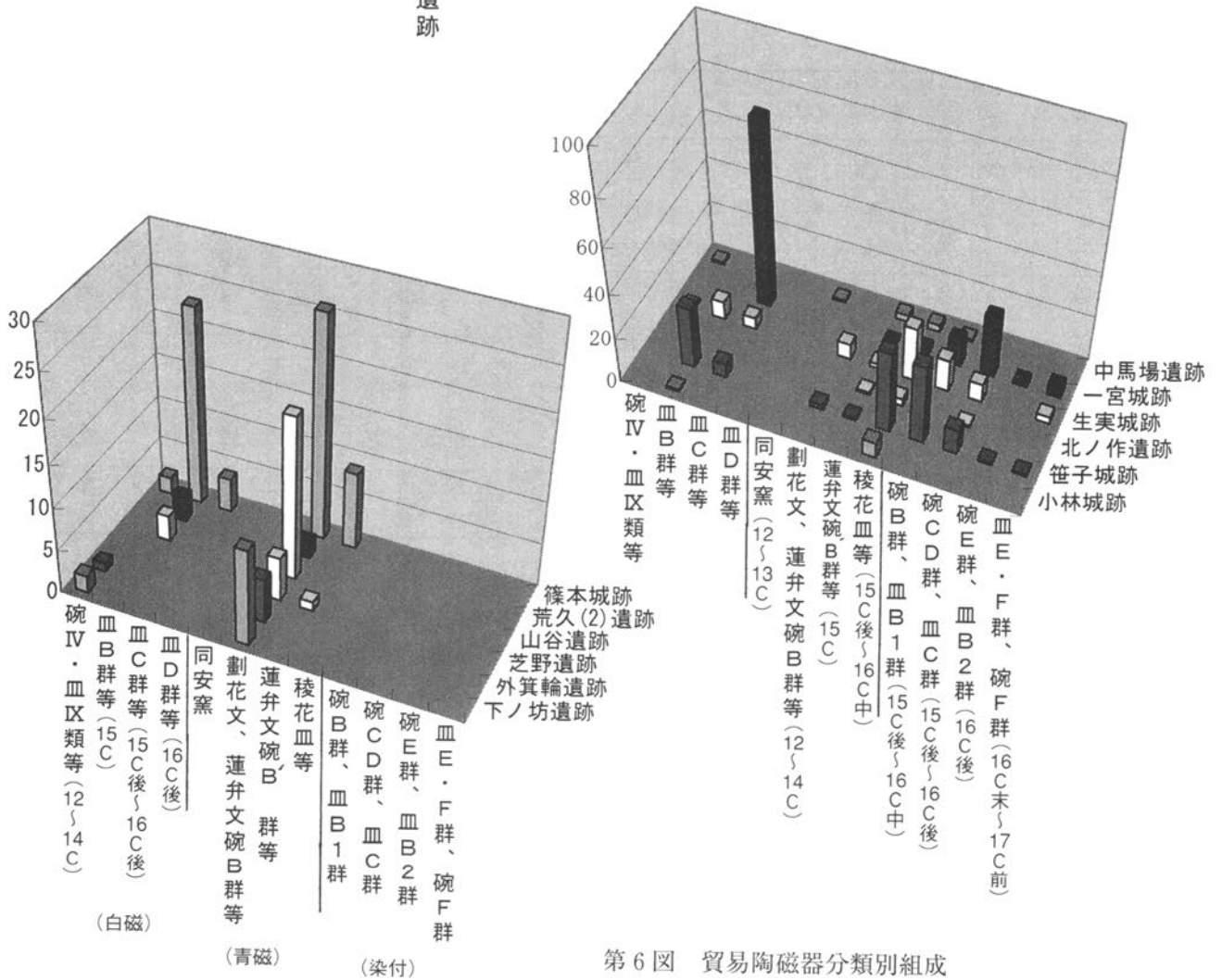
遺跡	分類	時期	貿易陶磁																																					
			白磁					青白磁		青磁															染付						他(褐釉陶器等)									
			碗	皿	皿B群	皿C群	皿D群	他・不明	梅瓶	他	越州窯系		龍泉窯系										景德鎮窯系		漳州窯		景德鎮窯系													
											同安窯系	劃花A類	蓮井文碗B群	無文碗D類等	蓮井文碗B群	無文碗E類等	蓮井文碗C類	端反皿等	稜花皿	他・不明	碗A群	碗B群	皿B1群	碗C,D群	皿C群	碗E群	皿E2群	皿E群	碗F群	皿F群										
木更津市 笹子城跡	碗	12~14c				1																																		
	皿	12~14c			26	6																																		
	大皿・鉢																																							
中世後期、国人領主の丘陵城郭縁辺部	壺・甕																																			4				
	他																																			31				
9,900㎡	小計1		0	0	27	6	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4	32	2	0	3	32	3	5	3	0	1	1	0	0	31	
	小計2		0			33	0	0	0	0				2												37	2	0	35		11		1			1		31		
	小計3				33		0							41																79							6			
四街道市 北ノ作遺跡	碗																																							
	皿																																							
	大皿・鉢																																							
中世後期、在地領主の台地城郭跡	壺・甕																																							
	他																																							
4,000㎡	小計1		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	小計2		0			0	0	0	0	0																	3	0	0	0	1		0		0		0		0	
	小計3				0		0							3																	1							0		
千葉市 生実城跡	碗		1											3	4																									
	皿				8	5																																		
	大皿・鉢																																							
中世中期の台地上集落、後期・末期の国人領主城郭外	壺・甕																																							
	他																																							
15,200㎡	小計1		1	0	8	5	0	7	0	1	0	0	3	4	0	0	1	0	0	0	5	19	7	0	0	14	6	0	2	0	0	3	0	0	0	0	0	0		
	小計2		1		13	7	0	0	0	0			7				1			24	7	0	14	8	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	小計3				21		0						39								25																	0		
一宮町 一宮城跡	碗														1														9		3					1	1			
	皿				79																																			
	大皿・鉢																																							
中世後・末期の国人領主の台地城郭跡	壺・甕																																							
	他																																							
4,400㎡	小計1		0	0	0	81	0	5	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2	2	0	0	12	9	10	8	3	2	1	0	4	10			1			
	小計2		0		81	0	5	0	0	0			1				0		3	2	0	12	27	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5		
	小計3				81		5						6																59									1		
柏市 中馬場遺跡	碗																																							
	皿			1																																				
	大皿・鉢																																							
中世中期から末期の台地上集落跡(屋敷群・町場)	壺・甕																																							
	他																																							
38,300㎡	小計1		0	1	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	小計2		1		0		1	1	0	1			0						3	6	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2			
	小計3				2		1						10																1									2		

第4図 主要貿易陶磁器の分類 (S=1/5)

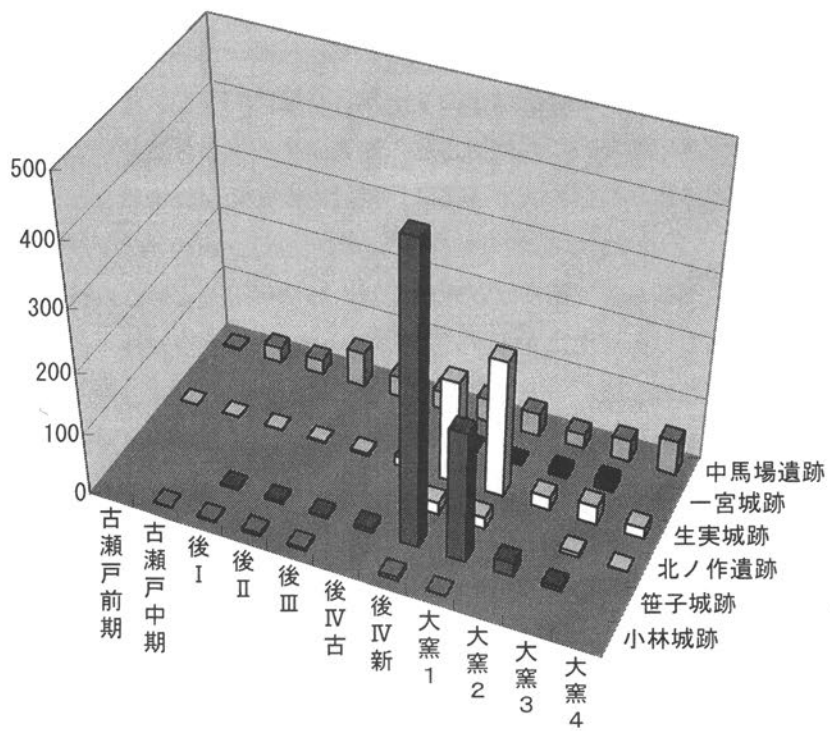
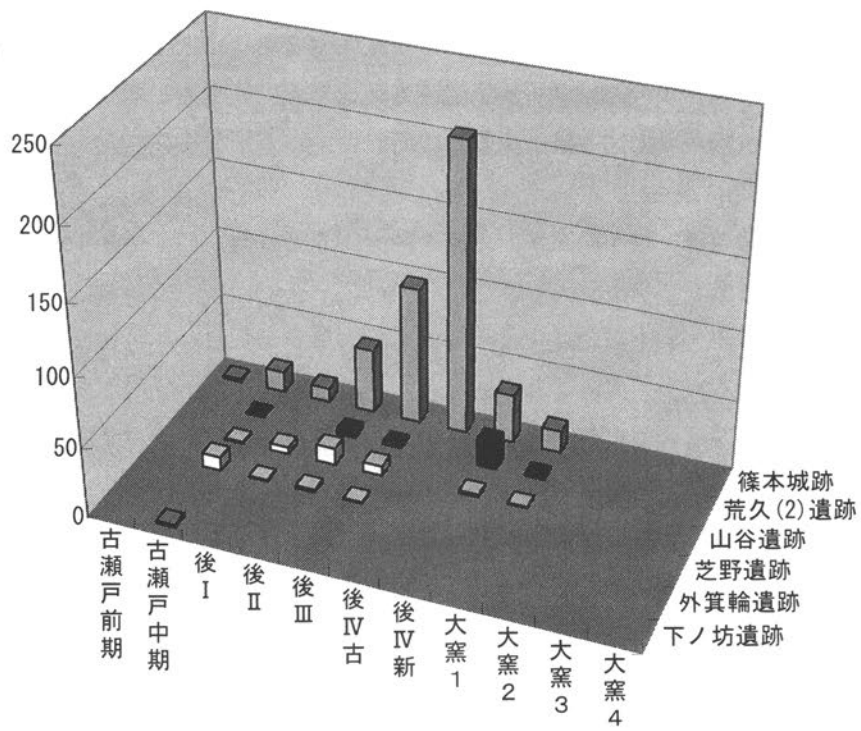




第5図 産地・種類別組成



第6図 貿易陶磁器分類別組成



第7図 瀬戸・美濃編年別組成

Ⅲ期中心の遺跡 笹子城跡・北ノ作遺跡共、後Ⅳ期新段階が中心で大窯1期に若干減少するが、以降は極端に減少する。笹子城跡は僅かに古瀬戸後期の遺物を含むが、優品として伝世したものと見られる。

Ⅳ期まで続く遺跡 生実城跡は笹子城跡・北ノ作遺跡同様、後Ⅳ期新・大窯1期が主体であり、笹子城跡同様古瀬戸前期から後期のものが微量ずつ見られるが、大窯3期（16世紀後半）・4期（16世紀末）も少量あり近世へ連続する。近世への連続は中馬場遺跡も同様で、中世を通じて平均的に出土している。一方、一宮城跡は後Ⅳ期新段階から大窯3段階までの短期で少量しか見られない。

③常滑（第8図）

Ⅰ期中心の遺跡 下ノ坊遺跡、外箕輪遺跡、芝野遺跡共、6型式期（13世紀後半）が主体であり、若干8・9型式（14世紀前後）も存在する。

Ⅱ期中心の遺跡 山谷遺跡・篠本城跡は中世前半から相当量が見られ、9・10型式（15世紀代）が主体であるが、以降は皆無となる。小林城跡は7～9型式、荒久遺跡は9・10型式のみである。

Ⅲ期中心の遺跡 笹子城跡は10型式が殆どであるが、北ノ作遺跡は全体量が少量で型式は不明である。

Ⅳ期まで続く遺跡 生実城跡・中馬場遺跡は中世全般を通して出土している。一宮城跡では、8型式以降少量出土しているが、笹子城跡等では見られない12型式（16世紀後半）の資料が出土している。いずれにしても11・12型式の資料は、瀬戸・美濃大窯3・4同様、千葉県内では少量である。

(3) 器種構成（第9・10図）

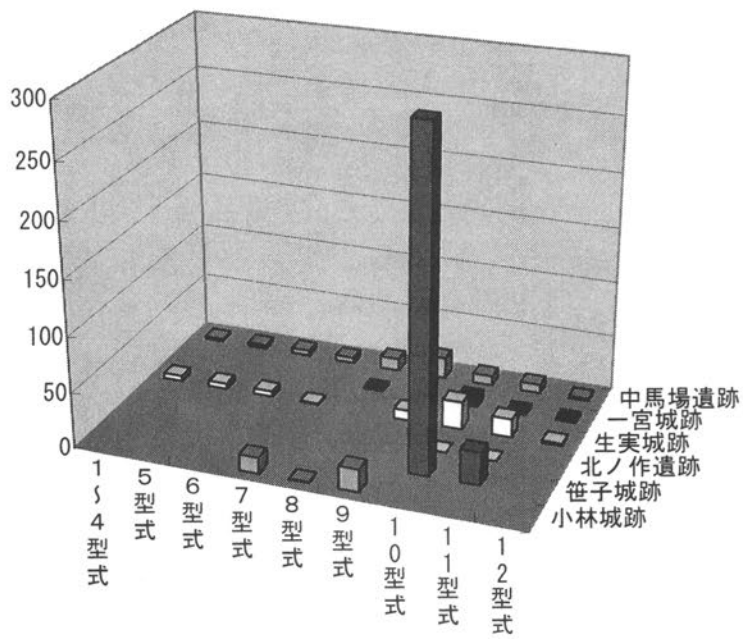
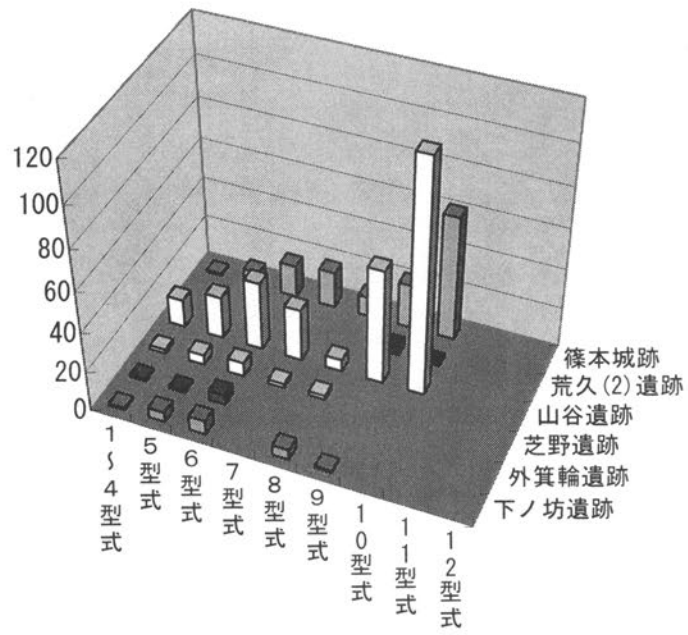
碗・皿は食膳具、大皿・鉢は主に調理具、壺・甕は貯蔵具、その他は香炉等の仏具他に相当する。本来大皿は食膳具、鉢は調理具であるが、必ずしも限定できないと考える。

Ⅰ期中心の遺跡 下ノ坊遺跡・外箕輪遺跡共、碗・皿は貿易陶磁とカワラケであるが、下ノ坊遺跡の井戸跡から漆器皿が1点出土しており、鎌倉の様相からも木製碗・皿が食膳具の一部を占めていたことが想像できる。大皿・鉢は常滑の片口鉢、壺・甕は常滑を主体とし渥美が少量入る。なお、外箕輪遺跡はカワラケが多く、鉢・壺・甕は少量である。これは同遺跡の調査面積の少なさと井戸の覆土資料が主体という遺構の制約に関係するものと考えられる。芝野遺跡は15世紀前半まで存続することからも、瀬戸・美濃製品が若干増える。

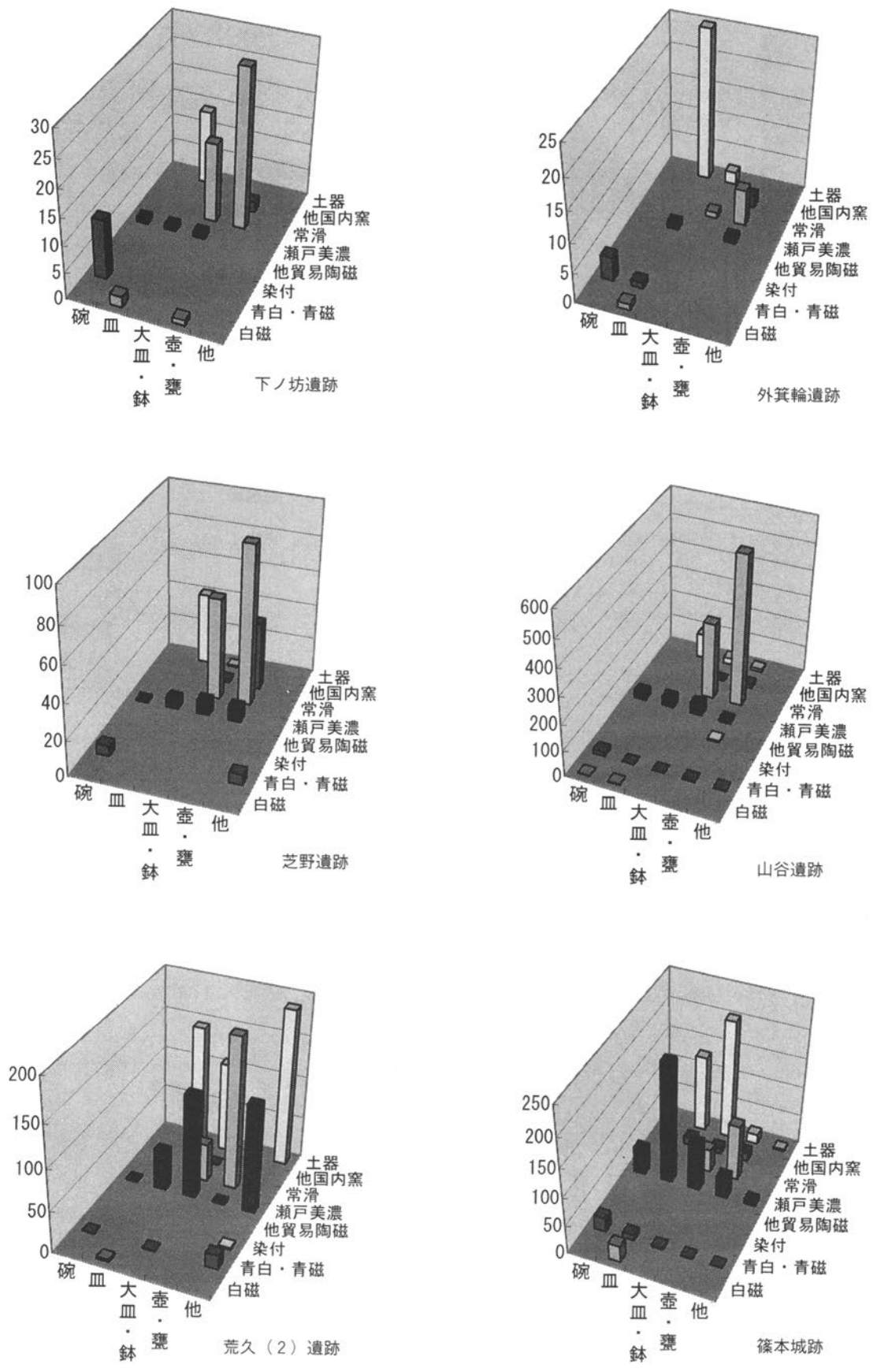
Ⅱ期中心の遺跡 Ⅰ期に較べ瀬戸・美濃窯及び在地土器の器種が増える。これは瀬戸・美濃窯は生産量の増加した古瀬戸後期になるので当然ではあるが、搬入陶器に影響された在地土器として、播鉢・内耳鍋が登場すること、東海系羽釜も若干入ること等がある。ところが、山谷遺跡は常滑製品の占める割合が突出し、瀬戸・美濃食膳具やカワラケは少ない。また篠本城跡は瀬戸・美濃窯の皿が多いが、これは15世紀後半以降に城郭化すると見られることから、他の城跡と同様の傾向が現れているとも考えられる。小林城跡は、カワラケ・土器播鉢が多く、瀬戸美濃はやや碗が多い。なお、荒久遺跡の瀬戸・美濃製品と土器に「その他」が多いことは、報告書では細片については不明としているものが多いためであるが、次の後Ⅳ期新段階のものが多く占めるようである。

Ⅲ期中心の遺跡 染付皿が入ることが大きな特徴である。また、常滑窯片口鉢が少量になる代わりに瀬戸・美濃窯の播鉢が皿と共に増加する。対象遺跡がいずれも城跡であることから、カワラケは多い。城郭・領主の規模の違いは、遺物量と産地・器種の多さとして、笹子城跡が北ノ作遺跡を大きく上回る。

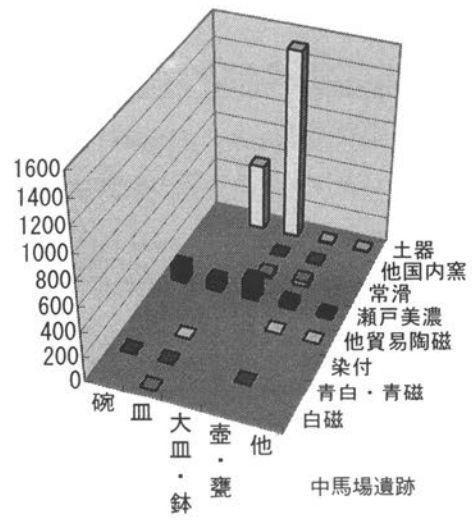
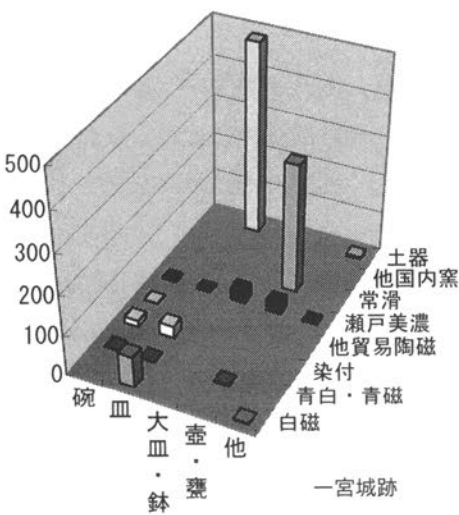
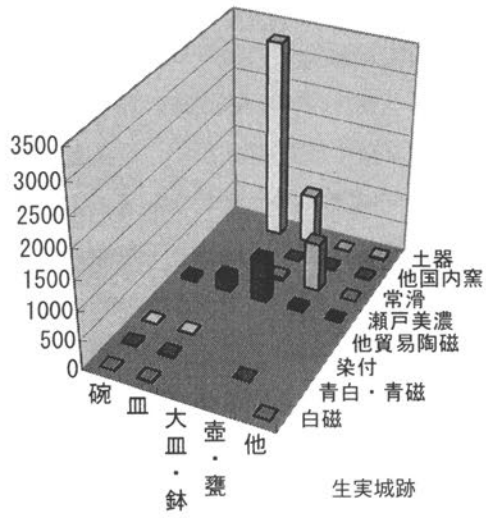
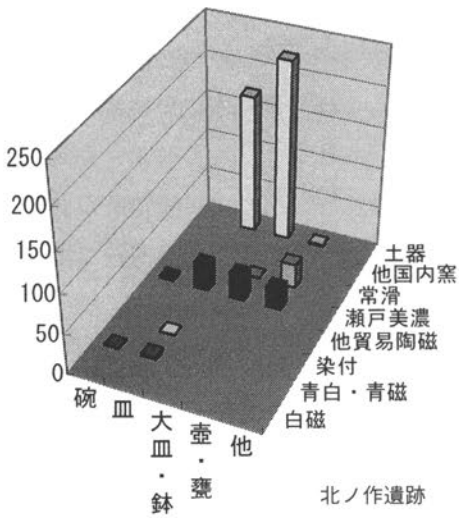
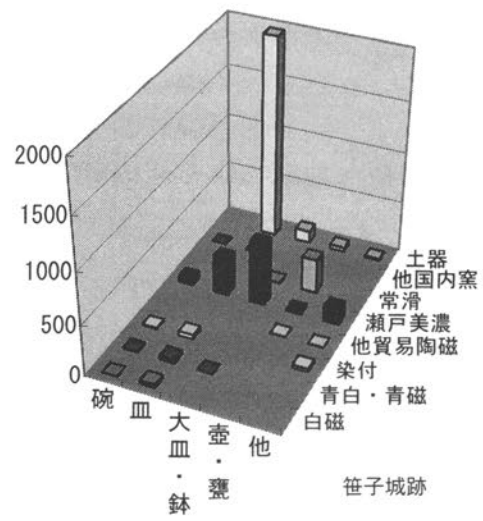
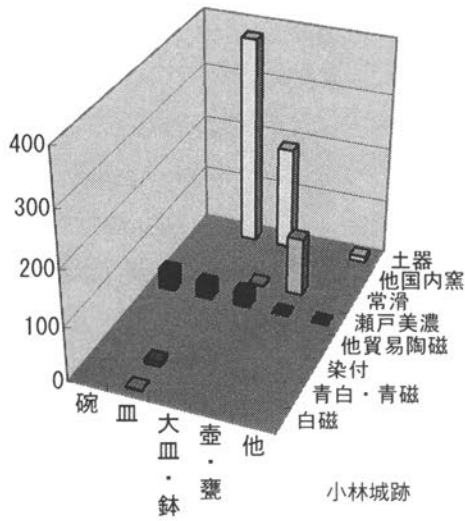
Ⅳ期まで続く遺跡 生実城跡は、笹子城跡の器種組成と同様の傾向を示すが、内耳土鍋が多い。一宮城



第8図 常滑編年別組成



第9図 種類・器種別組成(1)



第10図 種類・器種別組成 (2)

跡は、瀬戸・美濃窯が少量である代わりに白磁・染付皿が多い。中馬場遺跡は多くの産地・器種があるが、貿易陶磁は少なく、土製内耳鍋・播鉢が多い傾向である。

4. 遺跡の性格・地域による組成等

第2章で各遺跡の概要を記し、第3章で種類・産地別、編年別、器種の組成を概観したが、本章で遺跡の性格、地域の差異、編年の問題について概観してまとめとしたい。

(1) 遺跡の性格による差異

城館跡 下ノ坊遺跡、篠本城跡、小林城跡、笹子城跡、北ノ作遺跡、生実城跡、一宮城跡、中馬場遺跡の一部（屋敷跡）が該当する。まず、特に戦国期城跡は100m²あたりの出土量が20点～40点と多い。産地・種類では貿易陶磁器、カワラケが多い傾向である。また、本稿では分析対象外である木更津市真里谷城跡、酒々井町本佐倉城跡、酒々井町本佐倉大堀遺跡（本佐倉城落城後佐倉城普請の間の大堀館に推定される）等も含めて、鎌倉期の貿易陶磁や古瀬戸前・中期の当時の骨董品が少量見え、威信財⁽³⁷⁾と考えられる。また、カワラケは、小林城跡の地下式坑半埋没時に大量に投げ込まれた例や本佐倉城跡Ⅱ郭の妙見社跡でも明らかな様に儀式の器としての存在が確認できる。

城・館・寺院・街道等に付随する集落 山谷遺跡、荒久遺跡、生実城跡等の宿、中馬場遺跡が該当するが、篠本城跡も城郭化した屋敷群であり集落跡ともいえる。100m²あたりの出土量は10点前後である。いずれも城館跡に較べて長期に亘る遺跡が多い。

農村 外箕輪遺跡、芝野遺跡が該当する。調査面積が少ないこともあるが、100m²あたりの出土量は2～3点と少量である。いずれも中世前期の東京湾側であるが、貿易陶磁器、特に青磁蓮弁文碗が割合としては予想外に農村にまで普及していることが確認できる。しかし、沖積地の村は15世紀後半以降は全国的にも見えなくなることから、この時期から急増する城郭域に取り込まれた⁽³⁸⁾、或いは街道沿い⁽³⁹⁾や台地上に集村化し近世集落へ連続したことが推測されている。

(2) 地域差

千葉県北部 柏市中馬場遺跡、印西市小林城跡が該当する。土器播鉢、内耳土鍋等の土器が多い傾向がある。武蔵国・常陸国地域の影響が強い可能性が考えられ、北関東（内陸）的様相に近い。なお、土器播鉢に常滑片口鉢や瀬戸・美濃播鉢の模倣品が見られることから、常滑や瀬戸・美濃製品を補完する役割を果たしたものと考えられる。

千葉県中央部 四街道市北ノ作遺跡、千葉市生実城跡、光町篠本城跡が該当する。北部同様であるが、中馬場遺跡、小林城跡に比較するとやや減少する傾向と言える。なお、篠本城跡や一宮城跡は外房（太平洋側）の流通からも考える必要があり、今後夷隅・安房地区の遺跡のデータを追加したい。

千葉県南部 袖ヶ浦市山谷遺跡、荒久遺跡、木更津市芝野遺跡・笹子城跡、君津市外箕輪遺跡、鋸南町下ノ坊遺跡と調査例の多さからたまたま東京湾沿いである。土器播鉢、内耳鍋等は千葉県北部では15世紀以降に登場するが、当地域で該当する遺跡でもこれらの出土例は極めて少量である。その代わりに瀬戸・

美濃、常滑が多いだけでなく、その他の国内窯でも渥美、知多、備前、東播系等が少量ながら見られる。中世前期では鎌倉の御家人や寺院との交流が深く、中世を通じて物流が多かったと想像できる江戸湾側に位置する所以であろう。

(3) 編年に関する問題

貿易陶磁器 西日本に比較して出土量も器種も少ないが、同一遺跡の瀬戸・美濃窯や常滑編年と比較すると、特に15世紀から16世紀の染付や白磁の搬入が若干遅いように見える。例えば15世紀後半から16世紀前葉が中心とされる白磁皿C群は、瀬戸・美濃編年では同時期（古瀬戸後期Ⅳ期新～大窯1）中心の笹子城跡では少なく、瀬戸・美濃大窯2・3期（16世紀中葉中心）の一宮城跡では瀬戸・美濃窯皿を大きく凌駕する。

瀬戸・美濃窯 古瀬戸後期Ⅳ期新段階（15世紀後半）の出土量の多さは、全国的な築城ラッシュという需要に対応した生産・流通の拡大によるものと想像できる。その後の大窯2期（1530年～1560年頃）・3期（1560年～1590年頃）・4期（1590年～1610年頃）の遺物量減少については、八王子城跡や騎西城跡（3期中心）等一部の例外を除けば東国全般で同様な傾向があり、特に16世紀末期の織部焼等、安土・桃山文化を代表する製品は畿内の織豊系城下町等へ供給されたと見られている。つまり、出土量の少なさをもって前代で遺跡のピークを過ぎたと判断するのは早計であり、再検討が必要である。

常滑窯 中世後期は、窯の調査例が少なく調理・貯蔵具であること等で、瀬戸・美濃窯の様な細かな変化は少ないこと等もあって50年単位の編年であるが、恐らく実態は消費地の傾向では同時に搬入される瀬戸・美濃製品の画期に関係して、例えば15世紀後半とされる10型式の製品が多い等、各型式の搬入量は一定ではないことが考えられる。さらに、例えば片口鉢の7型式から9型式の判断や、大甕の10型式と11型式の中間形態と考えられる段階が存在することで、報告書担当者により若干のずれがあること等の問題がある。今後、一つの消費地としての千葉県内出土例から考えられる編年観は別稿で示すことにしたい。

在地土器 千葉県内の在地土器編年は近年各地域で検討が進行中である⁽⁴⁰⁾が、まだ固まった状況とは言えない。三国に分かれていること、流通経路が大きくは東京湾、太平洋、現利根川流域（旧鬼怒川水系）と分かれていること、領主の領域の著しい変化等による地域性が強いことがその要因と考えられるが、今後共、陶磁器の組成とその絶対年代とを合わせた地道な集成が必要であろう。

5. おわりに

1990年代以降、中世陶磁器の産地・種類・編年別の破片数或いは個体数のカウントによる組成比較が重要な方法となり、実測図・写真等が報告書非掲載の資料についても集計が掲載されつつある。古代の土器・須恵器等についても、図上復元できるもの以外は掲載されることが少ないが、近年破片数全集計の手法が取り入れられつつある⁽⁴¹⁾。一方で、出土品の膨大な量の増加と取蔵施設の不足から、報告書掲載資料を基準とした分類基準が作られた訳である。基準自体は必要ではあるが、報告書掲載外の資料を見たいという要望があった例がないという誤解もあったようである。しかし、自明のこととして、遺物の編年研究等の進展により、従来判断しえなかった資料が明らかとなることが多い。例えば、中世前期の還元焼成

された常滑片口鉢等は須恵器と判断されていた例は多く、千葉県内では出土例が少ないとされている山茶碗についても、今後は検討していく必要がある。

本稿は、(財)千葉県文化財センターの調査遺跡中心に組成を集計し、その概要を記したに過ぎないが、千葉県立房総のむら風土記の丘資料館で平成16年秋開催した企画展『中世房総やきもの市場^{しじょう}』準備の途中経過でもあった。企画展では、具体的数値を提示していないが、真里谷城跡、本佐倉城跡、八王子城跡のデータを加えているので、図録⁽⁴²⁾と合わせて見ていただければ幸いである。

(2004年7月 原稿提出)

註

- (1) 井上哲朗 2000「序章 第3節 研究史概要」「第1章 城館の構造等について」『千葉県文化財センター研究紀要20-中世城館跡の構造と特質-』(財)千葉県文化財センター
- (2) 藤澤良祐 他 2002「シンポジウム「戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品」の記録」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』10輯
- (3) 井上哲朗 2003「財団法人千葉県文化財センターによる近年の中近世遺跡の調査成果」『房総中近世考古』1号 房総中近世考古研究会
- (4) 小野正敏 1991「房総の城館出土陶磁器の諸問題」『千葉史学』18号 千葉歴史学会
- (5) 小野正敏 1996「出土陶磁よりみた千葉の城館」『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ-旧上総・安房地域-』千葉県教育委員会
- (6) 横田賢次郎・森田 勉 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4
- (7) 森田 勉 1982「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- (8) 上田秀夫 1982「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- (9) 小野正敏 1982「15~16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- (10) 小野正敏 1985「出土陶磁よりみた15・16世紀における画期の素描」『MUSEUM』No.16
- (11) 藤澤良祐 1995「瀬戸古窯址群Ⅲ-古瀬戸前期様式の編年-」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』3輯
- (12) 藤澤良祐 1982「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』Vol.8 東洋陶磁学会
- (13) 藤澤良祐 1991「古瀬戸古窯址群Ⅱ-古瀬戸後期様式の編年-」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X
- (14) 藤澤良祐 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯
- (15) 中野晴久 1995「常滑・渥美」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- (16) 笹生 衛 他多数 1998『千葉県の歴史 資料編 中世1(考古資料)』千葉県
- (17) 高梨俊夫 1990『安房郡鋸南町 下ノ坊遺跡B地点発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- (18) 笹生 衛 1989『外箕輪遺跡・八幡神社古墳発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- (19) 柴田龍司・笹生 衛ほか 1993「特集 小櫃川流域の中世遺跡」『研究連絡誌』37号 (財)千葉県文化財センター
- (20) 笹生 衛 2002『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財発掘調査報告書7-木更津市芝野遺跡-』(財)千葉県文化財センター
- (21) 柴田龍司 1994「鎌倉街道と市」『研究連絡誌』41号 (財)千葉県文化財センター
- (22) 井上哲朗 2002『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財発掘調査報告書9-袖ヶ浦市山谷遺跡-』(財)千葉県文化財センター

- (23) 小林清隆 1998『袖ヶ浦市荒久(2)遺跡』(財)千葉県文化財センター
- (24) 道澤 明 2000『篠本城跡・城山遺跡』(財)東総文化財センター
- (25) 井上哲朗 1994『印西町小林城跡』(財)千葉県文化財センター
- (26) 井上哲朗 1995「房総における中世城郭の築城から廃城－印西町小林城跡の発掘調査から－」『千葉県文化財センター研究紀要16』
- (27) 相京邦彦 2004『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財発掘調査報告書14－木更津市笹子城跡－』(財)千葉県文化財センター
- (28) 井上哲朗 1998「鹿島川流域における戦国前期城館の一形態－四街道市北ノ作遺跡の調査から－」『研究連絡誌』53号 (財)千葉県文化財センター
- (29) 築瀬裕一 2000「小弓公方足利義明の御座所と生実・浜野の中世城郭」『千葉城郭研究』6号 千葉城郭研究会
- (30) 築瀬裕一ほか 2002『生実城跡』千葉市埋蔵文化財調査協会
- (31) 築瀬裕一 2003「東国の戦国城館成立期におけるひとつの実像－千葉市生実城跡の調査成果から－」『千葉城郭研究』7号 千葉城郭研究会
- (32) 大和久震平 1984『千葉県長生郡一宮町一宮城跡城之内遺跡発掘調査報告書』一宮町教育委員会
- (33) 小高春雄・築瀬裕一ほか 2004『中世の一宮』一宮町
- (34) 井上文男 1999『柏市埋蔵文化財調査報告書38 中馬場遺跡(第4次)』柏市教育委員会
- (35) 築瀬裕一 2003「柏市中馬場遺跡の中近世遺物について」『房総中近世考古』第1号 房総中近世考古学研究会
- (36) 笹生 衛 1991「房総の中世土器様相」『史館』23号 史館同人
- (37) 小野正敏 1997『戦国城下町の考古学』講談社
- (38) 柴田龍司 1994「村落型城郭から都市型城郭へ」『千葉城郭研究』3号 千葉城郭研究会
- (39) 笹生 衛 1999「東国中世村落の景観変化と画期－西上総、周東・周西郡内の事例を中心に－」『千葉県史研究』7号 千葉県
- (40) 鳴田浩司 2000「第3章 出土遺物について 第4節 土器編年」『千葉県文化財センター研究紀要20－中近世城館跡の構造と特質－』(財)千葉県文化財センターほか
- (41) 松本太郎・松田礼子ほか 1996『市川市出土遺物の分析－古代の鉄・土器について－』市川市教育委員会
- (42) 井上哲朗 2004『平成16年度企画展図録 中世房総やきもの市場』千葉県立房総のむら